

共通教育の「英語」に関する思い入れ

著者	舘 清隆
雑誌名	共通教育フォーラム
巻	6
ページ	4-5
発行年	2007-03-27
URL	http://hdl.handle.net/10098/7894

共通教育の「英語」に関する思い入れ

教育地域科学部 異文化交流講座 館 清隆

1. はじめに

私が文京キャンパスで担当する共通教育の授業は、一年を通してみると、外国語科目「英語」を5コマ、A群第2分野「人間」の英語コミュニケーションに分類されている「スピーキングⅡ」を1コマです。学内の教員としては、比

較的たくさんの授業を共通教育で開講しているはずです。大学英語教育の本格的な議論は、別の機会に回すとして、ここでは、福井大学で英語を担当する中でできてきた信念について述べたいと思います。

2. 信念

他人からの受け売りですが、「信念」という表現は、かなり主観的な内容のもので、科学的な証明や証拠を必要としないものであると考えることにします。したがって、表題のように「思い入れ」と言い換えてもよいような類のものです。

キャンパスを歩いていると、「あなたの信念とは、こんなに程度の低いものですか」とお叱りを受けそうですが、次の2点が英語の授業を効果的にするための「信念」です。もっと正確に言うと、次の2点をまず達成することが、自分の授業を良くするための前提であると信じ込んでいます。

- (1) 受講生の出席率100%を目標にする。
- (2) 受講生が予習をして授業に出席するような仕組みを作る。

3. 出席率と予習

語学には訓練といった部分が多く、どれだけ時間を費やしたかが大きくものを言います。十数年前の改革で、福井大学の共通教育英語1コマの単位数が「1」から「2」に変更になりました。当時の大学設置基準によると、1単位に必要な学習時間は、教室での講義に15時間、教室外での準備の学修に30時間の合計45時間で1単位とすとなっていました。これはあくまでも原則であり、弾力的な運用ができるようになっていました。授業時間数は変えずに、単位数を「1」から「2」に変えるわけですから、最低でもこれまでの2倍は予習してくるように入講生をガイドしなければ、と思い込みました。もちろん、設置基準に合わせた計算をすると2倍では足りません。

この(2)の予習の問題と(1)の出席率の確保を同時に解決できる工夫として、次のような対応をしています。授業によって(1)~(3)を適宜複数個組み合わせて用います。

- (1) 毎回宿題を出し、授業の最初に提出を求め、宿題を提出して出席した場合に出席点を出す。
- (2) 授業中にはほぼ全員を指名し、何らかの発言(解答)を求める。解答すれば、出席点を出す。
- (3) 予習を確かめるための小テストを授業中に行い、正解者には加点をする。

4. おわりに

出席率と予習以外では、受講生を「積極的に」かつ「能動的に」学習活動に参加させるには、どのような工夫が必要かといった点も、もちろん、気になるところではあります。授業によっては、グループに分かれて英語で議論してもらい、結果を英語で発表するといった工夫もしていますが、すべての授業で使える手法ではありません。

信念に基づく私の議論は、本末転倒であるという反論が予想されます。本当に授業内容が魅力的で、英語力のアップが保証されていれば、自然と受講生全員が100%出席し、十分予習もして出てくるものと非難される気もします。この批判を反駁する証拠は持ち合わせていません。中身ではなく形から入っているだけかもしれません。なぜなら、上の(1)と(2)は信念として持ち合わせているだけですし、工夫の(1)~(3)は全て信念を実現するための工夫ですから。

最後に一言だけ付け加えます。「挨拶をきちんとできる学生を送り出してください」というある企業の採用担当者の方のご要望におこたえして、授業の最初と最後は挨拶「おはようございます」あるいは「こんにちは」と「ご苦労様でした」でけじめをつけることにしています。これは、決して冗談ではなく、かなりまじめに取り組んでいます。